

大森望（とそれを敵視する人々）についてぼくが知っていた二、 三のこと：1980年代からの遺恨とは (v.1.3)

山形浩生[†]

2015年12月21日

概要

2014年春に大森望が、SF作家協会への入会を否決されたのは、『オルタカルチャー日本版』に掲載されたセクハラと称される替え歌作成への関与を一部の人が確信しているからとも言われる。実際にはそうした関与を裏付ける証拠はない。だがそうした人々の確信の背景には、かつて巽孝之が大森望のある文章にプライドを傷つけられたことがあるとされる。ではそのプライド損傷はどのように発生したのか？

本稿は、1980年代の巽・岡本『一九八四年』論争と、大森・永瀬サイバーパンク論争をふりかえりつつ、今日のわだかまりに到る道筋を山形なりに検討する。その直接の原因は、山形が知る限りたったひとりであった。でもその背後には、1980年代にSF評論を学問的に確立させようとした動きとそれに対する反発や無関心、そしてその受容の弱さからくる苛立ちがあったように思える。当時のバブル経済とニューアカデミズムとサイバーパンク隆盛が、アカデミズム的な方法論の支持者たちの強気を可能にしまい、それらが短命に終わったことがその後の火種をさらに拡大したというのが本稿の仮説である。

本稿はその前後の文化社会的な経緯を検証し、今後の（悲観的な）展望を指摘した。

目次

1	はじめに	2
2	『オルタカルチャー日本版』の「真相」	2
3	因果連鎖のタイムスリップ？	3
4	「裁判以前からの軋轢」とは？	4
5	1980年代半ばまでの日本SFファンダム	5
5.1	時代背景	5
5.2	巽孝之 and The rise of sf academia	5
5.3	大森望とリア充SFファン活動	6
6	アカデミズム批評への反発	7
6.1	巽／岡本『一九八四年』論争：批評と「社会性」	7
6.2	巽孝之の自負と反発	9
6.3	SF外への活動の展開	10

* <http://cruel.org/>

† ©2014 山形浩生 クリエイティブコモンズライセンス 表示 4.0 (<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>)

7	サイバーパンク・バブル文化	11
7.1	サイバーパンク：商業性、ファッション性、評論の自立性	11
7.2	大森・永瀬サイバーパンク論争	13
8	アカデミズムによる大森批判ダメ押し	15
9	そして崩壊へ：1980年代末	17
9.1	市場停滞の予兆	17
9.2	山師の暗躍？	17
10	その後の展開	18
10.1	アカデミズム関連分野の低空飛行	18
10.2	SF ファンダムと大森望の地道な活動成果	19
11	まとめ	20

1 はじめに

2014年5月に本稿著者山形浩生が、ツイッターでいきなり話題にのぼった。そのうち一つは、『富岡日記』関連の話題だった。でもそれ以外にも一つ、その頃に山形がツイッターの話題にのぼっていた話が……大森望が日本 SF 作家協会に入れなかった話。その原因は、その作家協会に入っている異孝之と小谷真理が大森望にずっと私怨を抱いているから、ということなんだが、それをさらに悪化させたのは、山形が聞きかじってきて裁判のタネにもなった小谷擲揄の替え歌にあって、何やらその替え歌に大森が関与していたという邪推があるとかないとか。

2 『オルタカルチャー日本版』の「真相」

ここで問題になっている替え歌が実際にどんなものだったかは、以下を参照してほしい。

五分でわかる日本SF作家クラブと大森望の20年間

これについてまずはっきり言えることは、その替え歌をぼくに教えてくれたのは、大森望ではなかったこと。具体的にだれかは覚えていないし、なんだか十年以上前の裁判のときにもやたらにしつこく訊かれたので、いっしょうけんめい記憶を探ったんだけど出てこない。でも大森ではなかった。ぼくがその歌を聴いた宴会には、大森望もきていたのは事実だ。でもまず替え歌自体も主観的には、大森のスタイルとはちがう。ついでに、それは別にその宴会で考案されたものでもなかった。「こんな歌があるんですよ」とスラスラ歌って聞かされたものだ（そう、敬語でそう言われたのは覚えている。大森望はぼくに敬語なんか使わない）。その時点ではすでに、その筋の人々の間にはかなり広まっていたと解釈すべきだろう。だから、その宴会にいたからその替え歌作りに関係しているという理屈自体が成り立たない。そしてその成立に大森が関与しているという説は、ぼくの知る範囲では特に根拠はない。

まして、高野史緒が一部の主張として紹介するように、あの『オルタカルチャー日本版』のぼくのコラムの首謀者が大森望だなんてことがあり得るだろうか？ それはつまりこのぼくが、大森望ごときに命令されて、あの『オルタカルチャー日本版』のコラムを書き、裁判でもそれを一切口に出すことなく身体と財布を張って大森を守ったということ？

もちろん不可能ではない。ぼくはお金で動く人間なので、大森望が三千万円払ってくれたら、そのくらいよろこんでやる。でも、大森望もそこまで大盤ぶるまいをできるほど金持ちではないはず。そしてぼくもそれだけお金がもらえたなら、おもしろがって控訴したことだろう。だからこの線はないんじゃないだろうか。

ちなみに、その歌の原作者はだれかというのに加え、もう一つ裁判でしつこく尋ねられたことがあって、

それはぼくがジョナサン・カラーだかテリー・イーグルトンだかの『デコンストラクション』だか『ポストモダニズム』だかを読んだか、というもの。ぼくは裁判当時、すでにそうしたポモ文芸批評理論っぽいものに興味を失っていたので、読んでなかった。でも読んでないといったのに、何度も繰り返し訊かれたなあ。もし読んだと答えていたら、どういう法廷戦術が展開されたのか、今にして思えばちょっと興味がある。

が、閑話休題。この件について、調査を行った瀬名秀明（ぼくにも調査してくれればよかったのに）は、2013 年末に SF 作家クラブの会長を辞任する／追われるにあたっての文で、こう書いている。

以上の（引用者注：大森望の入会拒否の事情をめぐる聞き取り調査での）B 氏（引用者注：小谷真理）とのやりとりは、しかし収穫もあった。B 氏は「大森氏に、私はまだこんなに怒っているんだ！」と伝わってほっとしたと私に感謝の意を述べていたし、異議申し立て文の全文を会員に公開する必要はないものの B 氏がテクハラ裁判の件に関わる真相を知りたがっており、そのわだかまりがずっと残っているという点を多くの人に知ってもらいたいと考えている点では私も共感し、理解したからである。（瀬名秀明「2013 年の終わりに際して（その 2）」、『瀬名 NEWS』ブログ 2013.12.29^{*1}）

「真相」が知りたいのなら、全貌はいま書いた通り。『オルタカルチャー日本版』の話はおそらく大森望とは関係ないし、それが原因で SF 作家連盟に入れなかったのであれば、それはとんだとぼちちりであって、いい迷惑だろう。ぼくも大森望とありもしない関係を邪推されて、たいへん迷惑。そういうことだ。

でもこれは、裁判で（いやたぶんそれ以前から）とっくにわかっていたことだ。そしてこれ以上のことが今さらわかるはずもないことは、当然理解できるはず。大森関与の状況証拠として最大のものが「山形と同じ宴会にいた」というだけではねえ。同じ宴会にいた人は、他にもたくさんいた。『トーキングヘッズ』（というファンジン）の関係者とか、あれとかこれとか。濡れ衣を着せられる相手なら他にいくらでもいる。そもそもさっき言った通り、ぼくはすでに存在していた替え歌を聴かされただけであり、その宴会にいた人がその場で替え歌を考案したわけじゃないのだ。

だから「真相を知りたがって」というとき、それは本当の事実関係を知りたいという意味じゃなさそうだ。「真相」というのはどうも、当人が思いこんでいるストーリー、つまり「だれがなんと言おうと大森が悪い」ということなんじゃないか。だってそうでなければ、大森が関与したなんてことがまったく示されていないのに『大森氏に、私はまだこんなに怒っているんだ！』と伝わってほっとした」なんて話になるわけがないもの。むろん、両者の間に余人の知らない別の何かがあったのかもしれないけれど。でもそれなら、ぼくを巻き込まないでほしいなあ。

ちなみに裁判での争点は「ペンネームなのは周知の事実」という一節だけ。この一節でぼくは 150 万円以上払った（出版社と折半だったの）。でもこの反応を見ると、先方にとっての真の争点はそこではなかったのかもしれないという気がする。あの替え歌で自分がファンダムでネタにされているのがわかってしまい（広まってしまい）、それが悔しいということだったのかもしれない。その点について誰かに意趣晴らしをしないと気が済まない、ということなのかもしれない。その気持ち自体はわからなくもない。が、それを 20 年も引きずるとするのは尋常ではない。「私も共感し、理解した」という瀬名秀明の上での引用部分は、人間関係に気を遣う瀬名秀明の優しい社交辞令だろう。ぼくはそれに共感できる人がそんなに多いとは思えないのだ。

おしまい。

3 因果連鎖のタイムスリップ？

が……こんなものを読んでいるゴシップ乞食の卑しい読者がたぶん最も関心あるのは、別にそうした直接のつながり（だけ）ではないはずだ。この一件—それも何も明確な根拠がない憶測レベルの話—だけで、20 年以上たった今なお続く怨恨が生じるわけもない。その遺恨のそもそもの発端はどこにあったのか、大

^{*1} その後、瀬名秀明はこの一件とも関連した各種の醜悪な内紛にうんざりして、SF 作家協会会長職を辞したうえ、もう SF 業界とは一切関わらないと宣言してこのブログなどもすべて消してしまった。幾重もの面で、あまりに惜しいことである。ただしこのブログ記事だけなら、アーカイブなどを使っても読むことは可能である。

森望がいかにひどいことをしたのか、ということだろう。

そしてもう一つみんなが知りたいはずのこと。さっき、「本人が思いこんでいるストーリー、つまり『だれがなんと言おうと大森が悪い』という」ものがあるようだ、と述べた。なぜそんなものがあるんだろうか。しかもそれを直接裏付ける事実がまったくないにも関わらず、20年以上たってもそれが続いている。これはいったいなぜだろうか。

瀬名秀明の調査によれば、小谷真理が大森憎しと思うようになったのは友成純一が大森が黒幕だと吹き込まれたからだ、と本人が証言したそう。友成純一は一応、そんな入れ知恵をしたことを否定しているそうで、また小谷真理も、それについての確認調査については言葉を濁したという。なぜ真相を知りたいのに確認調査に同意しなかったのかは不明だ。そしてこれだけだと、大森関与説はほとんど根拠のない話だと思われるのに、なぜ受け取る側のほうはその出所もあやふやな一言だけでその後20年も続く怨嗟を抱くだけの確信を持ってしまったのだろうか。この一件はそうした環境的な下地から捉える必要があるらしい。裁判以外に、いやそれ以前から、何らかの確執があったと思わなければこれは説明がつかない。

この点は以下の文章でも明確に指摘されている。

さて、ここまで読んだの方々の中で上記の文章におかしな部分があることに気づいた方もいるかもしれない。

山形浩生氏がテクハラ事件を起こしたのが97年。大森氏が最初に入会を断られたのが92年。

……………タイムスリップが起きてる！

身内の確執にも時間移動！ さすがSF文壇だ！

というわけではなく、やはり先ほど紹介していた瀬名秀明元会長のblogをちゃんと読めばわかるのだが、大森望氏と巽孝之氏にはテクスチュアル・ハラスメント裁判以前からの軋轢があったわけである。(匿名ダイアリー [五分でわかる日本SF作家クラブと大森望の20年間](#) 2014.04.28)

さて、高野史緒はこの主張の困った点にちゃんと気がついているけれど、そこで指摘されているように、この説明はちょっと変だ。『オルタカルチャー日本版』の一件は小谷真理が主役なのに、根底にある原因として巽孝之と大森望の軋轢が出てくるというのはなぜだろうか？ さらに高野以外の多くの人々は、あまりそこによじれを感じていないようだ。これはなぜだろうか？ この分析はここでは控える。そしてもう一つ、ぼくはこれが、個人同士のやりとりよりはもう少し大きな方向性のよじれだと思っているので、必ずしも厳密に個人に帰着させる必要もないと思うのだ。

では大森望と巽孝之の間にあった、「裁判以前からの軋轢」って何なの？

4 「裁判以前からの軋轢」とは？

瀬名秀明日く：

私の印象では、A氏(引用者注：巽孝之)はかつてある文章によって大森氏にプライドを傷つけられたと強く感じ、大森氏を嫌うようになった。時間が経ってもその態度を覆すことは、後のご自身のプライドが許さなかった、ということだと思っている。(瀬名秀明『[2013年の終わりに際して\(その2\)](#)』)

こう書かれると、もちろんその「ある文章」なるものがとんでもない代物にちがいないと思うのは人情だ。そんなにすごい恨みを抱かれるなんて、それはどんなすさまじい文章だったんだろうか？

それがねえ……

みんなここで、すごい曝露話を期待していると思う。でも現実には、実に些末な話だ。1980年代末に、巽が大森に激怒している、という話は確かにSFファン業界で広まった。その理由は？ だれかが留学したとき、大森がどこかのファンジンで「巽孝之にならないといいね」とかなんとか書いたから。たったその一言。

ぼくの記憶が正しければ、その後四半世紀にわたる怨恨の原因になったのはこの一言だ。意味がわからないうだろう。いや当時ですら、なぜこれが激怒するべき話かほとんどの人にはわからなかった。むしろ、だからこそわかる人にはこれが面白いゴシップとして成立し、ぼくの耳にすら入るほど広まったわけだ。

本当にこの一言だけだったのか？ それははっきりしない。実際にこの一言が掲載されたファンジンをよくは見ている。それに山形は当時（というのは1980年代）のSFファンダムにおけるゴシップには決して強くない。また当時は、ネットもない頃で（パソコン通信はあったが、パソコン自体がかなり高価で、技術的にもハードルが高かったことに加え、ニフティサーブや日経 mix の各種フォーラムの多くはSF系に限らず嫌らしい内部ルールがはびこり古参の連中が私物化している陰湿きわまる場所だったので、近寄らない人も多かった）、ゴシップ伝搬も限られていた。だから、ぼくが知らないところであれこれあったのかもしれない。でもその一方で、みんなそういうケンカねたは好きだったし、そんな一大問題文書を大森望がどっかに書いたなら、確実に耳に入ったと思うのだ。だが、ぼくはそんな話題を記憶していない。

また揶揄された側はこの一言で本当に激怒したのか？ これもまた、確実に裏が取れていることではない。だって、どうでもいい話だし、事実だったとしても当人が個人的に解決すべき話で、外野が面倒見るようなことではない。ただ……それがゴシップとして流通できたということは、そこにゴシップを流通させる人々にとって、腑に落ちる何かがあったということだ。多くの人にとって、ここには当時のSFファンダムの状況をあらわす何かがあった。

で、その「何か」とは？ この一言はどういう意味なのよ？

ぼくはそれを一言で言うなら、SF、中でも特にサイバーパンクをめぐるアカデミズム至上主義的な方向性と、もっと気楽にSFを享受したいという方向性との対立だと考えている。いや、対立というのは必ずしも正しくない。むしろ当時の時代背景を受けたアカデミズム至上主義の思惑先行と、それに対する気楽なSF派のおもしろ半分突っ込み、というべきだろう。もちろん話が変にこじれているのは、関係者の30くらい偏った資質が大きく貢献しているけれど、根底にあるのはそれだ。

が、そこからここに到るまでの道のりはかなり遠い。その理解には、当時の背景知識が必要となる。ということで、話は1980年代に遡る。

5 1980年代半ばまでの日本SFファンダム

5.1 時代背景

1980年代初頭、日本のSFファンダムは平和でありながら、活況を呈していた。全国の大学SF研究会やそれ以外に各種SFサークルは、いまや各種分野で活躍する多くの人材を輩出。異孝之も、大森望も、牧真司も菊池誠も柳下毅一郎も、あの人もこの人も、そして不詳のこのぼくも、みんなそこから出てきた人々だ。そして、その活況と並行して、SF業界自体もいろんな形で活性化していった。SFの小説作品や、いまや古典となった映画『エイリアン』（1979）『ビデオドローム』（1982）『ブレードランナー』（1982）『ターミネーター』（1984）やも続々と登場。それに伴うファン活動も増え^{*2}、そこからSFに関連した業界や活動に入る人も増え、その人々がさらにSFを—という正のスパイラルが生まれつつあった。

もちろんそれは、必ずしもSFファンたちががんばったから、というわけじゃない。経済全体がバブルで好況だったから、いろんな分野の娯楽が拡大していたというだけのことで、SFもその中の一つだったにすぎない。でも、そうした環境変化を活かせるだけの人材を供給できる下地は、当時のSFファンダムには確実にあった。

5.2 異孝之 and The rise of sf academia

その中で異孝之は、創作面でも評論面でもきわめて水準の高かった『科学魔界』の親玉。すでに学者としても名を上げ、SF評論みたいなのを自分の文学研究キャリアの柱にしていこうと志していた。文学コンプレックスの強かったSF業界に、これが歓迎されないわけがない。

そしてこれは、学者として目の付け所もよかった。ちょうどアシモフやクラークで育った暗いじめられっ子たちが、欧米でも学者となり、子供時代に親しんだSFを研究対象とするようになっていたせいも

*2 当時は、ファンタジーはSFに入れるべきかとか、マンガはSFか、映画はSF小説と同列に扱うべきか、なんていう平和きわまるマイナーな論争が無数にあったが、いまから見れば何ら意味のある区分ではない。

あって、SF スタディーズみたいな分野が盛んになりつつあった。当時の SF 研究書を読むと、SF という新しいフロンティアに文学研究技法を導入して新規領域を開拓しようという熱気がある。もちろん、そうした研究の大半はくだらないものだった。が、スタージョンの法則もあるし、それがいけないというわけじゃない。むしろ凡庸な人々がそれなりに嬉々として活躍できるのは、ジャンルの発展においては重要なことだし、SF はそうした手法にもかなりうまくはまるのだ。

そして巽孝之がアメリカの大学に留学し……そしてその前からデコンストラクションとかメタフィクションとか、現代思想がかった文学理論に傾倒するようになっていた。念のため言っておくと、これは決して悪いことではない。そういう理論が明らかにしてくれるものだってある。さらに折しも日本はニューアカデミズムブーム。その手の話は『ユリイカ』や『現代思想』にも特集されたりする。巽の活動はそういう時代の流行にも見事にマッチしていた。SF と小難しい評論との合わせ技に多少なりとも商業性を持たせ、それがキャリアとしても見込みがありそうだという希望を持たせてくれた。

また一方で、巽は昔から各種 SF ファンダム系のイベントにもかなり積極的だった。各種 SF イベントで、少し難しめの評論系、思想系の企画をやろうとしたら、巽孝之は欠かせない存在だった。ついでに、留学中にアメリカのファンダムや SF 評論業界ともつながりを作っていったのも巽の功績で、これまたみんな感心していたし、大いに敬意を集めていた。

5.3 大森望とリア充 SF ファン活動

ではそれに対する大森望はどんな存在だったのか？ こちらは細かい話はいちいち書くまでもない。ウィキペディアに書いてある通り。特に当時のファンダムで、大森望はおもしろい小説をいち早く見つけてきておもしろく紹介する能力にかけては有数。翻訳も上手かったし、また解説も軽妙洒脱。それが何か深い思想的社会的分析を含んでいたかといえば、そんなことはない。が、そんなものが必要だなんて誰が言った？ ついでに大森望は器用だったから、そういうアプローチをしると要求されれば、それっぽいものをでっち上げるくらいお茶の子さいさいだった。同時に、かれは組織力もあって、イベントの企画から後進の育成（という大げさだが）まで、いろんなフットワークの軽さで名を挙げていた。

そして、大森望の強みは、扱える分野が SF に限られていないところにもあった。SF ファンの大半はおたくだ。悪い、侮蔑的な意味で。もちろんガールフレンド/ボーイフレンドもおらず、ファッションには疎く、夜遊びなんかに縁遠い。当時はもうバブル絶頂期で、ディスコが流行り、一方ではカフェバー（こじられたバーでしかない代物だけど、「コンセプト」なるものを前面に出したのが特徴）も流行っていたんだが、むろんほとんどの SF ファンはそんなものに足を踏み入れるどころか、半径 200 メートル以内に近づいたことさえなかった。

でも大森望はその時代にも嬉々としておにゃん子クラブだの小泉京子だの、ポピュラー文化ネタの話も押さえていたし、霞町のレッドなんとかだの、神楽坂ラトウンだっけ、そんな当時ファッションブルな場所について、スツールの座り心地がどうだったとか、見てきたような（たぶん本当に見てきたんだろう）話も書けた。つまるところ、大森望はリア充でもあったということだ。もちろん、世間的な基準からすれば大したリア充ではなかったろう。が、低レベルな SF ファンの中では群を抜いていたし、それをうまく SF ファン活動と絡められたのが大森の手柄だった。

しかもかれは、それがうまかった。当時、ニューアカデミズム方面でも、ヘーゲルの本にアイドルのサインをさせたりとか小泉今日子を現代思想的にもてやしたりとか、軽薄なのにこむずかしく気取ったアイドル論が流行ったりしていた。大森望は、実に巧みにそうした手口を導入できた。そして本当に楽しげに、しかも読める雑文が書けたし、一方では外国 SF の状況に関する時評も書けたし明解な分析もできた。当然ながら SF 関連のイベントには引っ張りだこだった。呼ばれるだけでなく、かれは自らあれこれ企画までしてそうしたイベントを盛り上げた。交遊範囲も広がったし、これほど便利な存在はなかなかいない。これまた大いに尊敬されていた。

むろんこの両方で SF ファンダムを二分していたわけでもない。むしろ、両者の支持者や交遊範囲は、少なくともファンダム内ではほぼ完全に重なっていた。それぞれお仲間はいたし、嗜好に基づく漠然としたグループはあったが、それらが反目していたわけでもない。そして他にもいろんな人が思い思いの活動を展開

していた。そしてみんな、うまく共存していた。この二人だって、この頃は別に対立なんかなかった。仲良く同じイベントで同じ企画に出ていた。紹介される SF が増えれば評論だって出番が増える。また、評論の翻訳なんて道だってある。評論により作品の価値が上がることだってある。そしていずれにしても、業界が狭ければつまり SF の市場が狭ければ一派閥を作るほどの余裕もない。いろんな人々があちこちでイベントを企画すれば、みんなで出かけてそれを盛り上げる。そのレポートをあちこちに書く。持ちつ持たれつ、という感じだろうか。

当時、巽孝之がいかにか SF ファンダムで重視されていて、そして大森望もそれを大いに後押ししていたことを示すものがある。1984 年に出た『巽孝之全仕事』なるファン出版だ。確か、巽孝之が留学する前に、いちよお祭りをとということで作られたものだったはず。ここに大森望も寄稿して巽孝之をほめていたし(実物が手元になし、具体的な中身について記憶はあやふやだが)、確かこの企画や編集も大森望がかなり関わっていたように記憶している。当時は、両者は実に良好な関係だったし、今日のような事態は想像もつかなかった。

両者が共に盛り上がったのは、おそらくは当時の日本のバブル景気のおかげではある。下部構造は上部構造を規定する。景気がよくなったので、SF 方面にもいろいろおこぼれがまわってきた。そして市場が拡大しているときには、ちょっとしたいさかきがあってもそれが本格的な反目にまでは広がる必要もない。

が、後のもめごとの種は生まれつつあった。これはおそらく二つの方向性がある。一つは、巽孝之的な脱構築 SF 批評の是非をめぐる反目と、もう一つはサイバーパンクをめぐる軋轢だ。

6 アカデミズム批評への反発

まず一般的な SF ファン側からは、巽に代表されるアカデミズムっぽい SF 批評に対する批判が出てくるようになった。それがこむずかしくておもしろくない、という揶揄はもちろん当初からあった。最初のうちは、これはレベルの低い SF ファンたちのひがみ、と思われていた。でもだんだん、それ以上のもっと本質的な批判が出てきた。まず、それが単なる輸入手法を安易に SF に当てはめているだけだ、というもの。さらに、脱構築しても目新しい発見がない、という批判。つまり、つまらないことをこむずかしくやっているだけで、そこに学術的な字面のレトリックを加えてごまかしているだけだというわけだ。人によっては、そもそもその無内容さ自体、脱構築とかメタフィクションとかの文芸批評手法そのものが持つ系統的な欠陥なんだ、とまで主張した。

売り言葉に買い言葉ではあるのだけれど、それに対してアカデミズム的な SF 文芸批評の立場から、一般 SF ファンに対する苛立ちも出てきた。

当時、巽孝之は自他共に認める SF 界の論客であり理論家でもあったので、この手の力学が明確に出た論争はいくつかあったように記憶している。中でも印象に残っている(そして手元に残っている)のは、古参有力ファンジン『イスマーチェリ』26-28 号で展開された、オーウェル『一九八四年』を発端とする論争だ。その当事者は、巽孝之と、そのとき同誌の編集長だった岡本篤尚だった。

6.1 巽／岡本『一九八四年』論争：批評と「社会性」

この巽・岡本『一九八四年』論争のきっかけは、『SF マガジン』1984 年 8 月号に掲載された、巽によるオーウェル『一九八四年』論だった。これについて『イスマーチェリ』26 号(1984)に同誌編集長の岡本による批判が載った。しかも、かなりきつい論調の批判だ。曰く：

巽孝之「一九八四」に考える (5) —偉大な兄弟によって見届けられた物語、さえも (SFM8 月号) は、あまたある 1984 年論中最悪のものの一つであり、彼は、彼自身の名誉のためにも、この一文を書くべきではなかった。(岡本篤尚「Editor's Column : SF と状況」『イスマーチェリ』26 号、1984 年 7 月、p.137)

岡本の批判は簡単。巽の一文は脱構築批評の手法で『一九八四年』についてあれこれ書いているけれど、基本的にあの小説の持つ政治的な主張についてまったく素通りしてしまっており、脱政治的というよりも、

積極的に反動的とさえいえる、というもの。そして、そうなるのは異隆之が輸入して使っている、アメリカ式の脱構築批評という手法が本質的に持つ反動性のためだ、というものだ。本節冒頭のまとめ通り。これが1,500字程度で述べられていた。

さて、ここでまず理解すべき重要なことは、この岡本の批判が異孝之の論説だけを扱ったものではないということだ。これは各種の『一九八四年』論について、それが実際の1984年（当時はまだソ連があった）の社会主義体制批判と、実際の1984年における日本の「右傾化」の批判になっていないというだけで全否定してしまうという、きわめて偏狭な代物だった。岡本は単に、世間の政治意識欠如を批判しただけで（そしてそういう意識のある自分はいえらいたいだけで）、異論説批判はその一材料でしかない。

ちなみに、他に狙上に挙げられていたのは、『一九八四年』をソ連の矯正収容所社会主義批判と見た笠井潔の論説（『テロルの現象学』を出した直後で社会主義批判ばりばりの笠井としてはもちろんそうなるだろう）、姫宮（同じ『イスカーチェリ』要人の波津博明の変名。たぶん勤め先の新聞社とのかねあいペンネームを使っていたはず）による、ソ連の現体制を擁護しアメリカのレーガンSDI構想を批判するという今にしてみればかなり珍妙な論説、さらには森下一仁によるカート・ヴォネガットへのインタビュー（この頃、ヴォネガットは反核声明とかやっていた）の三つ。反ソ、親ソ反米、イデオロギーコミットを避けたアカデミズム、政治意識欠如の甘い一般人という具合に、右から左へ一通り批判が展開されていたということだ。異批判が決して主眼ではなかったことがわかるだろう。

さらに、異隆之に対するものだけ見た場合でも、この批判自体は正当なものだったのだろうか？ ぼくはそうは思わない。

異の元の論説は、オーウェル『一九八四年』を執筆者（という設定の）ウィンストンの視点だけで見る必要はない、というものだ。ウィンストンの視点で見ると、確かに『一九八四年』というのは全体主義国家の圧政の中で、ささやかな自由を享受していたのが弾圧され、信じていた友人すら管理社会の一部で、そのわずかな自由すら洗脳により奪われる、という悲惨な物語となる。だからそれは全体主義批判として機能する。でもそれは逆に人民を愛するビッグブラザーが、道に迷った子羊を巧妙に導いて正道に引き戻した慈愛の物語ともなる。SFの名作とされるクラーク『地球幼年期の終わり』は、まさにそういうお話だ。ビッグブラザーのかわりにオーバーロードを置けば、両者はかなり似たような話だ。片方は全体主義の悲劇だが、片方は人類進化のポジティブな話と思われているのに……

岡本がこれを見てカチンときたのはよくわかる。『一九八四年』に関する論説がすべて特定のイデオロギー主張を持つべきと考えていた岡本にとって、『一九八四年』が全体主義批判の小説でないかもしれない、などと書くこと自体がその意義の否定であり、よくても単なるうわつらの類似だけにはしゃいでみせる言葉遊び、悪ければ現状容認の反動論説だ。岡本の立場からはもちろんそうになってしまう。

でも、それは三分の一しかあたっていない。社会主義は「新しい人」の理念を持って、本当に人を改造し、新しい段階に「進化」させようとしていた。その立場からすれば、『一九八四年』をそうした成長物語として見ることは当然可能だ。ウィンストンの最後の境地は、まさに人類幼年期にわかれを告げるノスタルジーとも見られる。逆にSFファンが無邪気によるこぶクラークなどの人類進化の物語は、実は『一九八四年』的な全体主義社会待望論の裏返しになってはいないだろうか？ 異の文章は、そうしたもっと大きな政治的な考察につながる可能性を持っていた。その意味で、それを脱政治的とか反動的と決めつけた岡本は視野が狭かったし、早計だった。

その一方で、岡本の批判は三分の一はあたっている。異孝之『一九八四年』論では、そこまでの考察は書かれていなかった。その文章自体も一般に、無用に晦渋だった。あれこれ他の文芸屋の文章やら用語やらが散りばめられ、「なんとかではなからうか。これこれではなからうか。だれそれがドンキホーテの読解で見せた新たな読みの転換にも似たナントカがここでも指摘され得るかもしれない」とかいう具合に仮定法や反語が特に深い必然性もなく続いて議論の本筋を見えにくくしており、でも内容的には上でぼくが400字ほどでまとめた内容しかない。読んだ人の多くは、この文章が何か主張するよりも、そうしたレトリックの誇示のためにそこにある、という印象を抱きかねない。

さてこれに対して『イスカーチェリ』27号（1986）のお便り欄に、異孝之からのコメントが掲載された（同誌 pp.130-132）。別に反論というほどのものではなく、むしろ岡本的な批判こそまさに自分が期待していた通りの反応であり、そういう岡本のような主流の見方を相対化することこそが自分の狙いだった、というもの。ただ社会批評（つまり体制批判）がないからといって現状肯定の体制擁護ということにはならないでしょう、という。至極ごもっとも。お便りの一部なので、このコメント部分は3,000字ほどだろうか。こ

のお便りですら、学者名乱舞の学術的な読みにくい文になっていることは指摘できる。が、それでもまだ気楽で理解可能なものだ。

岡本はそれに対して、同じお便り欄の編集者メモで、再反論を展開した（「Editor's Column : SF と状況」『イскарチェリ』27号、1986年夏、pp.141-151）。字数にして18,000字強というすさまじいボリュームだが、内容的には前回の批判から一歩も出ていない。さらにいまやポストモダンが流行っているから異流の脱構築的な読みこそがメジャーである、したがって自分のような社会批判的な読み方こそがマイナーで、それを相対化するのは体制擁護に他ならないという。偏狭でほとんど見るべきところはない。

でも岡本の立場というのは偏狭なだけにきわめて明確に示されていた。それを整理すると以下の通り：

- 社会批判（現在の社会主義や日本の右傾化への批判）を明示的に行わなければならない
- そのためには、それ以外の主張を持つ論説をすべて否定しなくてはならない。
- その一環として、社会批判を欠いた脱構築批評も（ワン・オブ・ゼムとして）否定しなくてはならない
- そのためには、それを採用している異孝之の文も批判しなくてはならない

結局これだけ。繰り返すけれど、岡本の主眼は異じゃない。単に社会批判を活性化させたかっただけだ。異の文への批判は、もとの文の中で行われた多くの批判の中の一つでしかなかったことから、これは十分に読み取れる。

そしてその次の号、『イскарチェリ』28号に、異孝之の大反論が載った（異隆之「アルマジロと踊れ：岡本篤尚氏への再・再批判、あるいはSF批評のために」『イскарチェリ』28号1987年、pp.142-155）。主張はきわめて簡単。『一九八四年』の読み方にもいろいろあるんだし、あんたの期待した読み方でないからといって批判されるいわれはない」というもの。これはまったくもってごもつとも。そして、ある特定の社会批判的な読み方を相対化することだって社会的な意味を持つこともある、という。これまたその通り。その部分だけなら、きわめて納得のいく文章だ。

が、この文章はそれ以外の部分がやたらに長かった。まずSFファンとしての共通性をしつこく主張した部分は、何が言いたいやらまったく不明。どうも、同じSFファンなんだから、SFの発展に貢献した自分を批判するのはけしからん、というふうにも読める。そして、半分は私信として書かれた後半部は、自分の脱構築批評の手法はニューアカブームに便乗したものじゃない、という話を延々展開するのみ。しかも「延々」は4万字近い分量になっている。「何か主張するよりも、そうしたレトリックの誇示のため」というさっきの評がそのままあてはまる。そしてそのレトリックも、テクニックを誇示するひけらかしよりは、自分をもっと認める、自分が不当な扱いを受けたという魂の叫び的な悲痛な印象すら受ける。

6.2 異孝之の自負と反発

そもそも岡本の批判自体が特定イデオロギーに偏った偏狭なものなのは明らかなのだから、本当ならそれを指摘して流せばいいことだ。またニューアカデミズムに直接影響されて脱構築したわけではないにしても、そのブームが当時の異の活動に有利に作用したことはまぎれもない事実だから、別にむきになって反論することでもないように見える。

でも異の反論文を見ると、明らかにこれはあっさり流せないことだったわけだ。そこには学者としての自負もあるだろう。そしてこの時点で、自分がSFファンダムにおいて不当な扱いを受けているという不満をどうやら抱いていたらしいことも、この文には表現されている。かれはもちろん、自分が日本SF（そしてSFファンダム）の発展と高度化に大きく貢献したと自負していただろう（そして確かにその一面は否定できない）。せつかく自分が、未熟で前時代的だったSF評論の分野に最新の手法を導入したのに、その手法自体を（幼稚で偏狭な）SFファンどもがけなすのを許し難いと思っていたこともうかがえる。自分の功績が賞賛されずに、むしろ否定的に捉えられていることへの苛立ちがある。

そして何より、岡本による批判がどう受けとられたかを示すのは、その冒頭部。岡本の議論の動機を、異の反論は以下のようにまとめる。

1. 異孝之を打倒しなければならない
2. そのためには、彼の方法論とされるディコンストラクションを批判しなければならない。
3. そのためには、ディコンストラクションにおいて通常手薄ということになっている「社会的意識」をつけばよい。

右に図式化した本末転倒こそ、一見ラディカル（華激？）を装いつつもその実—少なくとも私には—いっこうにラディカルに迫ってこない岡本篤尚氏の病巣と呼べるでしょう。（巽隆之「アルマジロと踊れ：岡本篤尚氏への再・再批判、あるいはSF批評のために」『イスカージェリ』28号1987年、p.142）

ここでの注目点。引用部分にある箇条書きの順序が、ぼくのまとめた岡本議論の箇条書きとは正反対になっていることがわかるだろう。この文章は、岡本による批判が自分個人をひきずりおろそうという悪意の産物であり、脱構築の批判とか、社会性の指摘とかは、そのための手段でしかないという認識を明言している。実際はといえばすでに述べた通り、明らかに話はまったくその逆なのだ。ついでに言うと、この前の号のお便り欄でのコメントの中でも、主にSFファンダム内での自分の扱いに対する不満が明確に書かれているが、そこでの不満からは明らかに変化が見られる。

なぜなら、今日私が「解体批評」を自らの方法論とするにあたっては、まともに取り組む気もない有象無象の輩から「流行かぶれ」「得意顔」「猿まね」「二番煎じ」「やめたほうがいい」などと箸にも棒にもかからぬ捨て台詞を浴びせられ続けるというのが実情でしたから、ここでの岡本氏のごとく、少なくとも本気で真っ向からぶつかってき下さる方に出会うと、心底嬉しさを隠せなくなるからです。（巽孝之「EVE—お便りのページ」『イスカージェリ』27号（1986）p.130、ただしこの手紙の執筆自体は1984年*3）

この1984年の時点の巽の文章はすでに、SFファンダムにおける自分の扱いについての大きな不満を述べてはいるが、それでもまだ岡本批判を嬉しく思うと書くだけの心の余裕もあった。でも1987年にはそんな余裕もなくなっていたようだ。それどころか、最初の批判の文脈すら見失って、とにかく自分個人への攻撃のために各種の議論が動員されているという思い込みまでが明記されている。

6.3 SF外への活動の展開

この頃から、巽孝之の活動はSF評論以外でも広がりつつあった。助教授になったのもこのあたりで、英米文学業界でも存在感は強まっていたはず。さらにちょうど、ブルース・スターリングが「スリップストリーム」と言い出して、文学側でSFっぽい部分を持ったものをまとめて、サイバーパンクと同じくブランディングしてセット販売しようとははじめていた。また類似の動きとして、アヴァンポップなどという文学運動も出始めていた。ラリー・マキャフリーあたりが担いでいたんだと思う。巽もそれを盛り立てようとした。そして日本版の同様な流派を作って輸出しようとした。

さらにそれは単なる紹介にとどまらなかったようだった。ちょうどこの頃、小谷真理が『SFアイ』日本版*4のエージェントなるものを始めている。これがどの程度のものであったのか、商業的にどの程度まで成長したのかは知らない。だが同じ『イスカージェリ』には、それがいかに活発な活動をしているかについて紹介する巽隆之の文章が掲載されている。文学運動を盛り上げて、その紹介と営業を自分でやり、さらにその流通部分と権利処理まで押さえることで、上流から下流まで一通り自分たちで掌握しようというのは、非常によい目のつけどころだ。が、あくまで一般論として、多少なりともそうした商売がからんでくると、いろいろグズグズする部分も出てくる場合も多い。

*3 特にソ連東欧を中心とした非英語圏SFの紹介で余人の追随を許さなかった名ファンジン『イスカージェリ』は、昔から不定期刊ではあったけれど、このときは数年にわたって間があいてしまっていた。掲載の遅れはそのせいだ。

*4 *SF Eye* は、1987年に創刊された、アメリカのSF系ファンジンで、評論やレビューを中心としていた。日本版は、その一部の翻訳に独自記事を加えた独自編集版で、創刊号は見たが、2号以降はぼくは見た記憶がない。そのエージェントというのはどうもそこに掲載された論文やエッセイの著作権処理を行うようなことだったらしい。

こちらへんで、ひょっとしたら大森望が（やっ！）チラッと顔を出した可能性のある。かつては大森が
いかに巽を評価していたかを示すものだった『巽孝之全仕事』も別の意味を持ってきたかもしれないのだ。
その序文で大森は巽孝之をこう評価している。

巽孝之は評価しない。分析するだけだ。機械のように（大森望、岡本の『イスマーチェリ』コラムでの
引用より）

当時はこれは褒め言葉だった。好きとか嫌いとかいう価値判断に迷わされず、明晰な分析を行うというわ
けだ。でも……岡本が引用した文脈だと、評価しない、分析するだけ、というのは脱構築手法に対する大き
な批判になっていた。それを念頭においてこれを読み返すと、大森が実は数年前から、ほめるふりをして
ざり核心をついた陰口をしのびこませていたのでは、という邪推さえできなくもない。

そしてこれと並行して、もう一つ SF 業界では大きな動きがあった。サイバーパンクの盛り上がりだ。

7 サイバーパンク・バブル文化

7.1 サイバーパンク：商業性、ファッション性、評論の自立性

サイバーパンクは、1984年のウィリアム・ギブスン『ニューロマンサー』（邦訳1986年）を皮切りとし
た SF 運動だ。これは SF 関係者にとっては、実にありがたい運動ではあった。

まずそれは、世間的な注目が SF に注がれる大きな契機となった。まだインターネットの普及は先だっ
たけれど、パソコン通信なんかが広まり、政府が光ファイバー網だの ISDN 網だのの旗を振って、電気通信
ネットワークがなにより人々の生活の中にいろいろな形で入り込んでくる兆候が見え始めたけれど、それが
どんな未来をもたらすかはだれも知らなかった。『ニューロマンサー』とそのサイバー空間は、当時のビジ
ネス業界にも、産業政策を求める官僚たちにも、目新しいビジョンを与えてくれた。たぶん大阪万博以来、
久々に SF が未来予測のタネとして世間一般に注目されることになった。

またサイバーパンクは、特にブルース・スターリングが戦略的にたちまわったこともあって、従来の SF
とは一線を画する、現代文明に対する高度な批評性を持った新しい SF として喧伝された。イデオロギー的
な指向も強く持ち、テクノロジーの持つ否定的な面も認識して、過去の SF や科学技術の持っていたユート
ピア的な夢が破れ、それが異様な形で再利用された高度管理社会を描くことで、甘いバラ色の科学技術未来
や単一テーマのディストピアとはちがう世界を描くのだ、とされた。そしてそのためには、サイバーパンク
は社会批評や技術批評、さらには参照されているかつての文明発展の夢までふくめた、きわめて高い批評性
を備えた小説分野だということにされた。つまりは、サイバーパンクをめぐるむずかしい理屈が大いに歓迎
されたということだ。少なくとも、それがスターリングたちの戦略的な動きだった。

もちろん一般読者が本当にそんなむずかしい理屈を歓迎したのかは不明だ。が……日本ではその直前に
例の『ヴァリス』邦訳（1982）が出ていた。小説そのものよりも、それに伴うこむずかしい理屈が歓迎さ
れ、商業性が出る—そうした可能性は、『ヴァリス』がそこそこ話題になったことからもうかがえたとし、
サイバーパンクでも同じ手口が使えるぞという気分をもたらした。そしてスターリングはその際に、ポスト
モダン的な批評の語彙や手法を大いに活用してみせた。

小説世界で活用されている、過去の技術の遺物を検討しなおす作業も大いに歓迎された。使い古され、放
棄された強者どもの夢が、サイバーパンクでは復権する。それを改めて見直す作業も重要だった。この点、
スターリングは本当に周到で、ギブスンと共著の『ディファレンスエンジン』（1990）でスチームパンクの
分野を確立し、そうした古い技術史観の使い回しすら一大ジャンルとして成立させた。脱構築的な手法は、
古い材料の再構成により新しい読み方を引き出す手法だ。サイバーパンクは小説の実作レベルでもそれを
やっていた。

一方でまた、ファッションやビジュアル面もあった。テクノロジーによるバラ色の未来が消えたディスト
ピアの荒野とスラムをさすらう、レーザーファッションの失意のアウトローたち—これは『マッドマックス
2』（1981）や『3』（1985）あたりを発端に、『北斗の拳』（1983）なんかにも波及していたけれど、『ニュー
ロマンサー』にもそれがあった。そしてもちろん『ブレードランナー』の都市風景も、サイバーパンク的な

光景と見事に共振していた。そしてまた、ノイバウテンとかのノイズ音楽や故三上晴子などのインダストリアル系のビジョンともうまく連動していた。ここらへん、別にサイバーパンクが仕掛けたわけではない。そういうのがあらゆる面で普及する、時代のあるフェーズが生じていたということだろう。が、どっちが先だろうと、サイバーパンクの周辺でそうしたファッションと芸術ジャンルが生まれて一般性を獲得しつつあったのは否定しがたい。

つまりサイバーパンクは、SF 業界にとって実に願ったりかなったり。新規技術の可能性を描く役割が再び SF に期待されるようになり、むずかしい評論と実作とが相互依存的に発展しあうことで、作家や評論家や技術史家の垣根もなくなり、評論や研究が実作のオマケではない自立した存在となった。そしてそのすべてが商業性を持ち、さらにビジュアルや音楽面でのファッション性まで持つのではないか—そういう期待が一気に生じたわけだ。

たぶんそれは、普通の SF ファンダムを大きく変えるものではなかった。もちろん、時代の風向きが何やら自分たちのほうに向いてきた、というのはみんなわかったし、滅多にないことだからみんな大はしゃぎではあった。SF 翻訳のニーズも高まった。ギブスの次を求めるメディアからの、新人作家紹介のニーズも増えた。『ニューロマンサー』(の黒丸尚翻訳) 独特の文体をまねた創作やパロディもたくさん派生した。でも、それはいつもの活動の延長戦でしかなかった。

だが……SF の中でもアカデミズム重視派にとっては、これはまったくちがう意味を持っていた。批評や評論が小説そのものの後塵を拝することなく、実作と肩を並べられる—脱構築はもともとそういう創作的な批評手法ではあったけれど、サイバーパンクはそれを体現してしまった。そして、そうしたこむずかしい分析がそれ自体として商業性を持ち、さらにはファッションナブルでもあり得る—サイバーパンクのブームは、そうした夢想を可能にしてくれた。

また当時の日本のバブル経済は、そうした夢想における日本の役割をきわめて大きなものにしてた。当時、日本こそは世界経済の未来を牽引するのだと、かなり本気で考えられていた。世界経済の首都は、ニューヨーク、ロンドン、東京であるというのが当時の常識だった*5。『ニューロマンサー』が千葉シティから始まっていたことからわかる通り、日本こそは技術経済の未来であると思われていた。日本は札びらを切って各種のものを買い漁る存在であるとともに、新しい文化やトレンド、思想の輸出発信地でもある(あるいは間もなくそうなる)と思われていた。つまりはそうした市場が大きく拡大するとみんなが期待していたということだ。

そして、日本ではそれをさらに補強する動きがあった。浅田彰と中沢真一の本が 1983 年に馬鹿売れしたことから注目を集めたニューアカデミズムだ。これまたむずかしい現代思想哲学そのものがファッションナブルであり商業性を持つという発想を裏付けるものだった。そしてもちろん、ハイテクと思想と未来像をつなげるニューアカデミズムの手法(浅田は理性的にそれをやったし、中沢はオカルト的にそれをやった)はサイバーパンク的な指向とも実に親和性が高かった。

おそらく、そういうアカデミズム的な観点からすると、これまで SF を支えてくれた従来の SF ファンダムは、幼稚で無邪気すぎる存在となった。せつかく今の SF ゲッターを離脱して本当に先進的な小説として発展しようとしている SF にとって、いまの仲良し内輪型 SF ファンダムはむしろ足手まといにすらなる。せつかく自分たちがレベルの高い議論をしようとしているのに、あいつらがいると SF ファンが馬鹿みたいに見えるじゃないか! そして最早、そうした幼稚な SF ファンどもに、SF を商業的に支えてもらう必要もない。いやそれどころか、さっきの巽孝之の文への批判に見られたように、自分たちの活動が SF にとって持つ意味すら理解せず、それを攻撃して足をひっぱる連中だらけじゃないか!

むろん、こんな見方がすぐに出てきたわけではないはず。そしてこんな明示的な形をとっていたとも思えない。だがこうしたサイバーパンク理解をベースに、大森望が大罵倒され、そしてそれに対して大森が反論した例があった。そのときの相手は、永瀬唯だった。

*5 たたとえばサスキア・サッセン『グローバルシティ』(邦訳筑摩書房)の初版を参照。彼女はこの三都市がもはや他の地域と切り離された自律的成長すらとげると主張していた。その刊行直後に生じた日本のバブル崩壊に伴う東京の地位急落のため、サッセンは同書第二版で苦しい言い訳を強いられることになる。

7.2 大森・永瀬サイバーパンク論争

さて……永瀬唯も、一筋縄ではいかない人物だ。かれは、もともと大学の先生出身とかではないという意味では、アカデミズムの人ではない。その一方で、この業界で永瀬ほどまめで資料をきちんと読み込んで論を構築する理論家も他になかなかいない。ぼくは永瀬にはいろんなことを教わった。ある時期まで、かれの書くものはすばらしく勉強になった。朝日新聞で『ロシア宇宙開発史』を書評したとき、「英語では標準文献のオーバーグ『軌道の赤い星』も邦訳が～」なんていう聞いた風な口がきけたのも、永瀬唯がギブスン「赤い星、冬の軌道」を論じた文章を読んでそんな本があること知って読んだからだ。

その永瀬唯にとって、サイバーパンクは千載一遇の好機だった。サイバーパンク、特にギブスンやスターリングは、単に未来コンピュータ技術だけの話をしていてのではない。過去の技術や SF 的観念が一巡して、異様な再利用を見せている世界がその舞台だ。デッドテック、過去の技術のパンクな再利用と最先端ネットワーク/ロボット技術の接合—これは永瀬唯の独壇場とすら言える世界だった。科学技術史と SF 史の絡み合いをあれほど緻密にやっていた人物は、日本にはほとんど見あたらなかった。

そしてかれは、非常な勉強家でもある。折しも、SF 文芸批評アカデミズムは技術知識の高い人材が不足していた。サイバーとかコンピュータとか科学っぽい話をしたいのに、なかなかそれができる人がいないので、歯がゆい思いをしていたと思う。永瀬唯はその穴を見事に埋めてくれる存在だったので、非常に重宝された。本も何冊か立て続けに出だし、『ユリイカ』とかでその手の特集があると必ず寄稿していた。まさに水を得た魚。

さて、その永瀬唯は今回の大森望 SF クラブ加入でも、以下のように明言している。

申立人でこそないものの、私は以前から、大森望が入会するなら退会すると公然と発言しており、その覚悟でした。RT aoyama_tomoki 大森望も敵が多い。SF 作家クラブ内に反対者がいて当然だ。入会に関して異議申立てがあったらいい。(永瀬唯、2014/4/27, [ツイートリンク](#))

ただし 1980 年代半ばまで、その怨嗟の対象は大森望個人ではなかった。海外 SF の紹介や翻訳を主な活動としている一派すべてが対象だった。大森望はその一人にすぎなかったはず。主要な批判対象は、むしろ山岸真か小川隆だったような記憶さえある。

だがその標的が大森望個人に収斂する一因とも思われる論争が、1987 年あたりにあった。そもそもの文章は、『ユリイカ』1987 年 11 月号「特集 P.K. ディック以後」に載ったブルース・スターリング「真夜中通りのジュール・ヴェルヌ」……についての、訳者永瀬唯の解説をめぐっての応酬だった。ジュール・ヴェルヌなんか今さら古いよ、という一派がいる（はずだ）と述べて、その解説はこう続く。

いわゆるサイバーパンク派が宣戦布告し、徹底的な精算を行おうとしているサイエンス・フィクションの日本ヴァージョン、SF ゲッター、とりわけ英米サイエンス・フィクション・レビューのエコールのことである。ニュー・ウェーブがこけた 1970 年代にはレイバー・デイズ・グループにすりより、次は何やら元気がよさそうだと、サイバーパンクに近寄って、そのくせい、彼らの不倶戴天の敵、ブンガク（ただしアメリカにおけるストレートなポピュラー・ノヴェルのこと）にこびへつらうバッフォー派まで、口先三寸でその魅力を解説してみせる、哀れなゲッターの子供たちのことだ。

彼らもまた言うだろう。「何を今さらヴェルヌなんて！」

彼らには、サイバーパンクが何をやろうとしているのか、てんで判っちゃいないのだ。浅田彰が“ニューロマンチック”を論じたり、何やらニュー・アカ方面で“サイバーパンク・デイ”とかが企画されていたり、しめた、今までダサイクサイと馬鹿にされていた SF だって、とうとう立派に六本木でも通用する流行を生み出したのだと、記号論やら、実存（阿呆！）やら、シンクロシティーなんぞと気取っては見せても、結局、本音は“カッコよさ”だったり“アンジーかわいい”。SF ファンとしての薫陶めでたく、時のうつろいのなかで育て上げた好き嫌いの感性が、今、ハヤリだぜいとはしゃいでみせるのがサイバーパンクというわけである。

（中略）SF ゲッターの見えざる支配の網に、ギブスンやスターリングは、今、逃げ場のない精算状を

たたきつけているのだ。彼らネクロマンサーが、お前はすでに死んでいるという声が、(中略) 我が SF ゲッターにまで、本当にとどろき渡る時、子供たちのユートピアは消えうせ、SF 的なものの本当の再生の時が訪れる。SF の子供たちの殲滅。それこそが、サイバーパンクの勝利が約束するものなのだとすることに、子供たちは決して気づこうとはしない。(永瀬唯「スターリング『真夜中通りのジュール・ヴェルヌ』訳者解説」、『ユリイカ』1987年11月号 pp.223-224)

引用した最後の段落に満ちた高揚感と自負の晴れやかさは比類がない。でも多くの批判文はそうだけれど、この文章もいま読むと、批判されている対象よりは書いた人自身のことを多く物語っている面もある。この文章の筆の勢いを見ると、ついに自分の時代が来た、とはしゃいでいるのは、SF ゲッターよりはむしろ永瀬唯本人のほうにも思える。さらにもう一つの皮肉。永瀬唯は著書『疾走のメトロポリス』で、多くの産業がホビイストの活動から始まり、それを足がかりに発展しながらも、最後にそのホビイストたちを切り捨てることで成熟したというホビイストの悲劇を様々に描いている。この文章で、自分がそれを矮小化された形で繰り返している自覚は、永瀬唯にはあったのだろうか。

だがそれはさておき、ここで述べられているのは、サイバーパンクというものに対する受容をめぐる対立だ。永瀬は、サイバーパンクが(永瀬的には)真に重要なテーマを扱いつつあるのに、日本の SF ファンダムがそこに注目しようとせず、表層的な意匠にだけはしゃいでいる点に怒りを示している。必要以上に党派的な書きぶりになっているのは事実。でも、党派性を強調するために後付で何か論点をでっちあげたものではない。

ちなみに引用の中で唐突に出てくる「アンジーかわいい」というのは、ギブスン『モノリザ・オーヴァードライブ』(早川 SF 文庫)の解説で、山岸真が使った締め的一句だったと思う。アンジーっていうのは同作に登場する、ネットアイドルみたいなもんだ。この時点では、別に永瀬唯が敵視していた中心は大森望ではなかったことが、こんなところからもうかがえる。

とはいえもちろん、大森望は楽しいお遊び的なファン活動も好きだったし、ここで批判されている「SF ゲッター」の一人ではある。かれがこれに対する反論を買って出たのは、このかなりひどい決めつけに対して当然ながら腹立たしさを感じたからだろう。その反論がどこに掲載されたかは忘れた(理科大のファンジンだったろうか?)。その内容は、別にスターリングや永瀬唯的な方向性を否定する気はないけれど、「アンジーかわいい」の評価はさておき、サイバーパンクなんて別に六本木で通用したりしてないよ、と述べ、ついでにいま(1980年代末)の流行の中心は六本木なんかじゃない、カフェバー(当時流行っていた)とか湾岸系のクラブ(ゴールドとかエンドマックスとか)とかが先端なのにあんたは知らないだろー、その光景がすでにサイバーパンクを先取りしていて、ずっとこっちのほうがスタイリッシュだ、というような文章だったと記憶している。

それに対して永瀬唯は再反論したんだが、そこでまず論点としてあがったのは、確か真のかっこよさとは何であるか、というものだった。そして自分の文章がいま『ユリイカ』にも掲載されたことを挙げ、それこそがいまや市民権を得たメジャーな見方なのだ、と匂わせた。それどころか「ぼくはユリイカ文化人♪と自慢したところで、ゆくぞ!」と書いてから(音符まで確か本当にあった)、大森批判を展開したのだ。

その批判とは要するに、大森望なんて SF の内輪のタコソボで、いまの時代に真にかっこいいのは、古い SF の残滓を振り返りつつ、湾岸開発のデッドテックを見ながらサイバー空間の未来に没入することなのだ、とかなんとか。さっき、大森望はリア充だったと述べた。そのリア充に対して、お前なんかもうダサイ、いまや自分こそが真にかっこいいと思われる時代が来たんだ、と自慢して見せたのだ。

しかし……現実問題として、そんな時代は来ていなかった。そもそも永瀬は、そういう流行とか“カッコよさ”への依存を批判していたんじゃないか? それを抜きにしても、ぼくたちダサイ SF ファンがそれだけでかっこいいと思ってもらえるようなオイシイ話は、当時もその後もなかった。同じくダサイ奥手の SF おたくだったぼくとしては、そう主張したい気持ちはいやというほどわかる。そして確かに、かつてよりはすこし SF の地位が上がったかも知れない。でもリア充と張り合えると思っはいけない。さっきも述べたように、気持ちはどうあれ、当時のぼくたちはディスコだのクラブだのカフェバーだのに実際に足を踏み入れたことすらない人々が多数だった。

そして大森望は、次の反論ですかさずそこを突いた。あなたの言っていることって全然かっこよくないよ、と一蹴したのだ。古い SF 雑誌の束を抱えて、CRT(まだ液晶の時代は来ていなかった)に頭から突っ込んでくみみたいな間抜けなイメージしかない、怪我するだけだからやめとけ、と(確か、まさにこういう表

現で反論が書かれていた)。あんたが得意になっているその『ユリイカ』だって、SF ファンダムと鍋釜の狭いタコツボ業界じゃないか。あんまりサイバーパンクとか大げさに考えてはいけないし、そんなことで威張りなさんな、と。

その上で大森は、自分に対する批判をきっちり打ち返していたが、そこはたぶん最早メインではなかった。一言で言うと、「自分はファッションナブルになった」という永瀬唯に対する大森望の反論は「いや相変わらずダサイよ」というものだ。そして……それがまさにその通りだ、というのが悲しいところではあった。ぼくを含むダサイ SF ファンたちはみんな、その悲しみを痛々しいまでに感じたし、それだからここの一連のやりとりを見て、自虐的に大笑いしたのだった。そしてもちろん、みんながみんな、サイバーパンクをそんな読み方しているわけじゃないし、その必要もないという主張もまた、その通りだった。

もう一つ、やはり言うておくべきことがある。大森望は別に、永瀬唯の主張したようなかっこよさを決して否定する人物ではなかったということだ。それどころか、当時の SF ファンダムの中で、永瀬唯の活動の価値や意義を本当に理解し、それに最も共感を抱いて支持できる人物の一人が大森望だった。かれはそういう地道な研究の意義も十分わかっているし、それを地道にやることの真のかっこよさもわかっている。ただ、かっこよさにもいろいろあるのだ。あの文で大森が揶揄したのは、それが六本木だの湾岸クラブだののバブリーなファッションとして通用するようなかっこよさじゃない、ということにすぎない。多少なりとも状況がちがえば、こんな変なボタンの掛け違いのようなことにはならず済んだはずなんだが……

この論争のおかげで「SF ゲッター」の筆頭で大森望がきてしまったんだろうとぼくは思っている。そしてこれは同時に、妙なアカデミズム至上主義に対する明解な拒絶でもある。それがあくまで「至上」主義批判であって、アカデミズム批評そのものの否定ではない、といった細かいニュアンスを読み取る余裕は、おそらくその時点ではなかっただろう。だからこの論争は、大森望と永瀬唯という個人の論争を超えて、SF ファンダム内にあった、いわば思想的な派閥同士の争いでもあった。ここから、アカデミズム至上主義の人々が、大森望は自分たちを馬鹿にしているのだ、と判断しても不思議はなかったはず。

8 アカデミズムによる大森批判ダメ押し

こうした SF ファンダム（そして特に大森望）に対する批判が、ある個人の域を超えて当時の SF 関連文芸アカデミズム全体に広がっていたというしるしはあるだろうか？ 実はある。ダルコ・スーヴィン『SF の変容』（大橋洋一訳、1991）の訳者あとがきで、大森望が突然、藪から棒に罵倒されているのだ。

*ある日、わたしは突然、一瞬べつの時間流へと紛れこんだかのような眩惑を経験した。書店の店頭でパリンソン・ベイリーの『時間衝突』（大森望訳、創元推理文庫）が今年度（1990年）「星雲賞」受賞の帯をつけて高く積まれていたからである。1973年に出版された原書の翻訳がいま賞を受賞するのも珍しいが、ただ、いかにもイギリスの作家にふさわしい政治的なこの SF 小説が高く評価されたということは、SF の評価をめぐる新しい展開を予感させる時間線を実に開いている。これから多民族国家へと移行せざるをえない状況をにらみつつ、あらたなナショナリズムの不吉な台頭の兆しをみせる日本の（いま）において、たとえベイリーの SF は、そのユートピア的解決が想像的というにふさわしい妥協の産物ではあっても、人種差別と全体主義の恐怖を語っていて、いまのわたしたちには、きわめてアクチュアルな衝撃力をもっている（破滅の道を突き進む狂気の右翼的全体主義的人種差別主義者を描くこの小説のエートスは、同時期に書かれたル・グインの『世界の合言葉は森』と通底している—ル・グインのこの SF はその牧歌的なタイトルとは裏腹に恐るべき政治小説である）。けれども『時間衝突』の文庫本のあとがきには、時間問題のアイディアの卓越性を賞賛する多幸症の文章がつづき、そのあげく「SF であることが最重要課題であって、現実の社会問題は SF に奉仕しているのである。まさにサイエンス・フィクションの鑑といえよう」という、二十世紀初頭のロシア・フォルマリスト顔負けの陳腐な主張があらわれる。歴史特殊性の抑圧が、いかに悪辣な政治学と連動するかを、ここで説いてもはじまらないが、これがフォルマリズムにアナクロニスティックに毒された現在の日本の SF 批評的ディスカールの「鑑」であることはまちがいないだろう。たとえばカミュの『異邦人』をかつての批評は不条理としてのみ回収し、ナチス・ドイツの占領下で出版されたこの作品が、偶然の犠牲者としてアラブ人を、選択しているという政治的無意識を見ようとしなかった。この種の非政治

的なるがゆえの政治性だけは、SF の批評的ディスクールはおびるべきではない。それは SF ジャンルの特質と伝統への侮蔑以外のなにものでもないのだから。

いま凱歌をあげているのは、SF に文学性、科学性、対抗文化性等、多くを望みながら、政治性だけは望まない批評的ディスクールだが、逆にいえば、そうしたディスクールはそれゆえに、ある意味でどのようなディスクールにもまして SF の危険な潜在的可能性を知悉しているともいえよう。処理不可能な放射性廃棄物を日々生産し、石油資源の粘濁化にもっとも貢献し、二酸化炭素問題によって原子力発電の危険を隠蔽しようとする原子力産業。環境問題を世界管理の手段とする大国群。放射能汚染された食物の無規制の氾濫。農薬化学薬品に汚染された食料を強制給餌させる世界規模の食料産業。それと軌を一にする世界の飢餓人口の増加。地球の温暖化をはじめとする気候異変（いまこれを書いているとき、東京では十一月だというのに雷雨になり、台風も上陸した）。フロンガスによるオゾン層破壊。人口過剰問題、難民・移民問題。天文学的額の第三世界の負債。株式市場の崩壊。情報社会という名の情報管理。中東湾岸危機……。東欧の社会主義国の崩壊を、資本主義の勝利として祝福する多幸症の支援を得て、たとえば極東のアーキペラゴに住む、経済以外には軍国主義だけが売り物の民族の国では、自国民すらも心身ともに完全に歪曲化する破滅への道の地ならしが進行している現在、こうした状況をアクトリアルにそしてまた全体化して捉え、そのうえヴィジョンをも示せるジャンルは、おそらく SF しかない。その資格証明を回顧しつつ確認すること。いまの日付けにおいて、本書が読まれるべき意味はまさに、これではないだろうか。

いまひとつの日付け—おそらくそれは、確実にもうすぐ破滅する地球の不確定の未来の一日だろう。ポスト・アポカリプスのある日、現在の文明が崩壊したあとのミュータント化した新人類か、あるいは人類ならざるなにかが、砂漠化した地表に、あるいはガラス化した地表に、埋もれた図書館への入口を見いだすかもしれない。彼、または彼女、またはそれは、その場所で塵芥寸前の、分子化する一歩手前の本書を発見するかもしれない。そして知ることだろう—二十一世紀をまたずして崩壊への後戻りできない過程を辿りはじめた旧文明が、その全歴史をとおして、破滅へと自覚のないままひた走ったわけではないこと、それに歯止めをかけようとした伝統が厳然としてあったこと、この霊長類がすべて多幸症で愚劣ではなかったことを。(大橋洋一訳者解説、スーヴィン『SF の変容』(1991) pp.476-478)*6

引用部分前半では、ベイリー『時間衝突』の大森望解説がむちゃくちゃに言われている。SF の読み方はかくあらねばならない、そこに描かれたイデオロギーを鋭く読み取らねばいけない、そうでない読み方はおめでたいバカで、いやむしろ反動イデオロギーに無意識のうちに貢献する邪悪な糾弾されるべき読み方なんだ、という主張さえそこにはある。うっひゃあ。これに力強くなずく人もいたのかもしれない。だが多くの人はこれを見てぼかーんとなった。ちなみにこの批判部分は、小さめの字で脚注的な扱いで挿入されている。

非常におもしろいことだけれど、この大橋洋一の大森批判というのは、永瀬唯による「SF ゲッター」批判とまったく同じ内容だ。ぼくはこれが偶然だとは思わない。大橋洋一はさっきの永瀬唯翻訳が載った『ユリイカ』のサイバーパンク特集にも寄稿しているけれど、別に永瀬唯の文を読んで直接影響されたわけではないだろう。でも既存 SF についてえらく杓子定規で生真面目で規範的な SF の読み方を強要したがる、という点で両者は同じだ。

ついでに大橋の言う政治学だの社会科学性だのが、いかにお寒いものかはそれに続く後半の引用部分を見て欲しい。聞きかじりの社会問題を羅列しただけだ。しかも大橋はそれを本気で解決すべきとも思っていない。そうした問題を並べられる意識の高い自分を誇示しただけで、羅列したらあとは人類滅亡後の世界を高踏的に夢想してみせて悦に入っている。こんな文を見たら、その人類以後の生命たちは、ここにこそ多幸症で愚劣な生き物がいたのだなあと思心することだろう。が、閑話休題。

さてもちろん、ヤブから棒にこんな罵倒をされたら、大森望だっておもしろくはないだろう。その一方で、それがしばらく前の永瀬唯による批判とまったく同じものだという事もわかっただろう。当然、それが大橋洋一や永瀬唯個人のものというより、アカデミズム至上主義の文芸批評的 SF 観から出てくるものだというのもわかったはずで、その信じがたい偏狭さにムツとしつつも、興味はおぼえただろう。むろんその

*6 Acrobat の OCR 機能に大感謝。こんなバカな文を読むだけでなく手で入力するなんて、とても正気であることではない。

後の永瀬唯による執拗な攻撃^{*7}ともあわせて、嫌みの一つも言いたくなっただろう。こうしたことが、後の軽口についての大森側の下地だったとぼくは思っている。

9 そして崩壊へ：1980年代末

9.1 市場停滞の予兆

さっきの『イスカーチェリ』で不満を爆発させた巽エッセイも、大森と永瀬がやりあったのも、いずれも1986-87年だった。バブル崩壊にはまだ少し間がある。でもSFとその周辺業界は、数年間続いた自分の天下がそろそろ下火になりはじめ、自分の市場が以前ほどの勢いを持っていないと感じ始めていたはずだ。たとえばそれは、サンリオSF文庫が1987年に廃刊となったことからもうかがえる。

またニューアカデミズムも、1980年代後半にはだんだん低調になってきた。その旗艦誌みたいな『GS たのしい知識』（創刊1984年）は、1988年に終わっているし、最後のほうは当初のニューアカ的な指向とはちょっとずれた、キワモノっぽい方向に動き始めている。もちろん、その「キワモノ」に故H・R・ギーガーが含まれていたり（山形初の商業翻訳はギーガーの画集だ）、さらにウィリアム・バロウズが持ち上げられたことで、たまたまこの山形にとってはよい時代が始まったとは言える。だが、デリダだのド・マンダのといった代物は明らかにそろそろ飽きられはじめている。それと並行して、デコンストラクションだのメタフィクションだのといったお題目も、以前ほどは珍重されなくなってきた。そちらの市場もだんだん成長が鈍化した。

それをみんなが火急の問題としてとらえたかどうかはわからない。でも各種の活動—それはスリップストリームでもアヴァンポップでも—の食いつきが期待したほどではないのは感じたはずだし、何とかしようという軽い焦りはあったと思う。景気の山がピークを迎え、成長が鈍化するとき、多くの人はそれが景気のせいだとは思わない。むしろ自分たちのやり方がまずいのか、あるいはもっと多いのは、だれかがじゃましているのだと思ってしまう。そしていずれにしてももっとうまくやれば、かつての旧成長が回復できると考える。

9.2 山師の暗躍？

多くの事象で、流行がピークに達して下降期に入るあたりで、たいがい非常にやまっけのある連中がたくさん入り込んでくる。というより、パイの全体が縮小する中でヤマ師比率が相対的に高まって目立つようになるというのが真相かも知れない。そうした連中も交え、広義のSF業界でも、サイバーパンク利権みたいなものがちょっと発生していた。ウィリアム・バロウズでもそうだったけれど、1980年代末あたりのバブル爛熟期には西武系のあれやこれやで、だれそれと呼んでイベントをやりましたとか何とかいう話をぶちあげるヤマ師がたくさん出てきたのだ。その際のだれに声をかけるとかいかこの話はこっちに通せとか、おれにあいさつがないのは何事だとか、その手の仕切りのお話で関係者のグチをいろいろ聞かされたことは記憶している。『ユリイカ』の文章で永瀬が述べている、「ニュー・アカ方面で“サイバーパンク・デイ”とかが企画されていたり」というのもそうした動きの話だろう。他にもいくつかあった。いずれも、ポツと話だけ出て何度かうちあわせと称するものがあって……それっきりだ。

この手のイベント系ヤマ師たちは、大風呂敷ばかりやたらに広げ、期待を持たせては潰すのをいくらかでも繰り返す。それ自体は悪いことではない、というかその手のイベントというのは見込みで動くから、必然的にそういうものになってしまう。それに伴う具体的なめごとについては、まったくおぼろ。雑誌『WAVE』19号（1988）で遭ったスチュアート・アーブライトは、自分の企画をだれぞに何やら邪魔されたとぼろくそに罵っていた。そのへんのいきさつも不詳。怪しいい加減な人が暗躍する中で、真面目な人ほど疑心暗鬼になり、苛立ってしまう。ある人が生真面目にきちんと仕切ろうとするのも、他の人から見れば何でも自

*7 たとえば『ur』5号（1981）のコラムでは、大森望が業界を私物化して売れそうな映画ノベライズ本の翻訳を融通しあい、コネと利権で私服を肥やしているという攻撃が行われている。だがそこでやり玉に上がった、たとえば『ミュータント・ニンジャ・タートルズ』のノベライズ本などが、そんな利権を伴うほどの商業性を持つオイシイ仕事だろうか？

前でやろうとする党派的な動きに見えたりすることも多い。こころへんは本当に憶測だけれど、そういう状況でアカデミズム系の人々の思惑と、従来の SF ファンダムの思惑とが一致しなかったり衝突したりしたケースもあっただろう。

これが当時の雰囲気だった。そして「異孝之にならないといいね」という発言も、そういう環境の中で発せられたものだ。当然ながら、大森望のほうは別に本格的な反発があったり、何か組織的に異孝之やアカデミズム至上主義一派を排除しようと企んだりしていたわけではない。大森は社会人経験もあるし、枯れ木も山の賑わいというのを知っている人物だから。かれはちょっとした揶揄と茶化しのつもりで言っただけだ。異孝之の名前を挙げたのだから、その個人というよりはむしろ、文芸アカデミズム全般というニュアンスのはずだ。が、さっき紹介した『イスクーチェリ』でのすさまじい反発ぶりを見ると、異孝之が激怒したというのも十分うなずけるのだ。この一言だけが原因だったはずはない。むしろ、こうした各種の動きから—一部は個人的、一部は派閥力学から—疑心暗鬼が生じ、個人的な資質に基づく曲解などもそれに拍車をかけ、それにまつわる反目がだんだん積み上がって……

長い長い話になった。が、今にいたる軋轢というのは、こういう形で生まれているものだったはず。

ひょっとしたら、その標的は大森望でなくてもよかったのかもしれない。ひょっとしたら、あの裁判でだれかが入れ知恵しなければ、「山形が全部悪かったのだ」ということで万人が納得して、大森望の話はうやむやになり、それですべて収まった可能性もあるのかもしれない……が、ここで if を持ち出しても仕方ない。

10 その後の展開

さてここで景気が復活して、アカデミズム至上主義的な方法論が市場を回復していたら、また話は変わっていたかもしれない。が、もちろん不景気は続いた。その方向で撒かれていた各種のタネがどうなったかというとき—あるとき突然消えた。

10.1 アカデミズム関連分野の低空飛行

まざサイバーパンクは—何をやろうとしていたにしても、後が続かなかった。ギブスの初期はすごかったが、その後のギブスはかつてほどの輝きはなかった。中心的なイデオログだったブルース・スターリングもその後もっと技術史っぽい方向に移行し、小説的な関心は薄れ、だんだん Makers 運動なんかに移行した。期待の星だったニール・スティーブンスンも、暗号とか BeOS 万歳とかに向かっただけ（いま見ると、まだそういうのを続けてみたい）。ジーターとかジョン・シャーリーとかも結構よかったのに。そしてジャック・ウォーマックは—いま調べたら、1993 年以後は、一作しか書いていないのか。『パパの原発』のレイドローも……

その周辺でスリップストリーム文学とやらも、ましてアヴァンポップとやらも—一気に消えた。こちらは消える以前に、そもそも本国ですらあまり盛り上がりさえしなかったというべきか。いわんや日本においてをや。これは運動というよりは、あまりできのよくないマーケティング用レツテルだったからなあ。その一人だったジョナサン・レサムは、いまやディックの神学がかった妄想メモの編纂なんかしてる。

一時出ていた、あまりできのよくないサイバー系 SF/文芸評論も、一時の勢いを失った。ポラッシュ『サイバネティックフィクション』（邦訳 1991）とか、いま見るとあまりのくだらなさに卒倒しそうになる。いや当時からくだらなかつたっけ。これは拙訳パーセルミ『シティライフ』（白水社、1995）**訳者あとがき**を見て欲しい。なぜ勢いがなくなったか？ そもそもそうした評論自体の多くが付け焼き刃で低級だったうえ、ネットやロボット関連では現実の技術進歩のほうに急速でおもしろかったからだ。さっきも述べた通り、SF 作家たちですら、実物の技術のほうにどんどん傾倒していった。ネット以外も脳科学や遺伝子工学、経済学のエキサイティングな発達を SF 実作がまがりなりにも導入できるようになったのは、しばらく後だ。ましてその追いの（しかも勉強不足の）文芸評論なんか、出る幕はなかった。

そして**サミュエル・ディレーニ**も……

デコンストラクションとか言っていたボモ評論業界も、急激に外部への訴求力を失い、ソーカル事件でほとどめを刺された。もちろん、それぞれの業界ではほそぼそとデコンストラクションしている人がいるん

だと思う。そしてそこで出てきた研究手法や分析手法が役に立っている場面も、あるのかもしれない。でも一般の認識はちがう。業界外からの認識を挙げておこう：

「嫌味な言い方だが、学問の世界で熱心な支持者を得るのは、頭はよくても独創性のない若者に、賢さをひけらかす機会を与えてやれる理論なのだ。脱構築派の文学理論がそうだった。均衡ビジネスサイクル理論もしかり」(ポール・クルーグマン『経済政策を売り歩く人々』原著 1994、邦訳ちくま学芸文庫版 p.87)

これと同じ頃に、草創期のネットで少し話題になった文章がある。Chip Morningstar, “**How to Deconstruct almost anything**” (1993) だ。基本的に、デコンストラクションはデタラメなこじつけを行う無意味な技法にすぎない、というのがその主張となる。これが妥当かどうかについては議論があるだろう。でも、そう思われている部分があるのは否定できない。

またこの凋落と共に、ポップな文化と理論的に楽しく戯れるような可能性も消えた。西武パルコ文化も、1990年代に入って日本の不況が本格化するとだんだん消えていった。中森明夫のように、ポップ文化とポモニューアカ的高踏理論との組み合わせをポップ文化側から支えていた人々も、消えていった。乃木坂の新鋭ディスコだったトゥーリアで、シド・ミード造形の照明が落下して死者3名を出した事故(1988年)が皮切りだったろうか、カフェバーもクラブも次第に低迷しては潰れた。そしてもちろん、湾岸開発のデッドテック風景礼賛も、実際に不景気で開発が停滞してみると、思ったほどはかっこいいものでないのが明らかになった。小説の中では、そうした停滞は華やかな開発や繁栄との対比で暗い輝きを放っていた。でも華やかな開発側が消えると、どこもどんよりした停滞の風景になっただけ。実際にデッドテックの廃墟になっていたお台場開発は、結局大したSFを生むこともなかったし……

むろんバブル崩壊とともに、日本や東京の地位も失墜した。日本にあると思われていたハイテクの未来はすぐシリコンバレーに戻る。アジアの首都といえる都市は、香港やシンガポールに移り、かつてグローバル企業のアジア統括拠点の所在地だった東京は、すぐに単なる日本営業所の置き場でしかなくなってしまい、もはや日本の動向への注目も消えてしまった。

SF 評論や、SF スタディーズといった研究分野はそれなりに続いているんだろう。ただ、すごく発展しつつある分野ではなさそうだ。この分野が自分のささやかな縄張りから出て、何か他の分野に対して刮目すべき影響をもたらす成果をあげているようには見えない。SF についての各種評論は、SF プロパー以外の人がやったもののほうがおもしろく思える。もちろんこれは、ぼく自身の変化があるんだろう。

そして大森望が欠落していると怒られた政治性やイデオロギー性だけれど、それを重視するカルチュラルスタディーズ的な文芸批評は、まだ一応命脈を保っているようではある。でも、それもぼくが見る限り衰えつつある。ガヤトリ・スピヴァックすらそれを認めている(『ある学問の死』、梶ピエールの書評を特に参照)。人種差別なり社会格差なりは、別にそれ自体として問題なのではない。それが現実社会での待遇、たとえば雇用、所得、医療、教育なんかの面での実質的な差につながる限りにおいてでしか問題ではない。だったら—そうしたイデオロギーが本当に問題だと思うのなら、それがSFの中に見つかるかどうかをつきまわすより、実際の待遇改善につながる制度づくりとかでがんばるべきでは？ あるいはその原因にある社会経済要因を直接的に分析したほうが有益じゃないの？

結局、アカデミックな耽溺が高踏文化と戯れつつ、同時にそれがファッション性と商業性と社会性を確保できるのだという希望は、全面的に崩壊したことになる。外的な要因も多いし、予測不可能なものが多い。たぶん何よりも、景気の悪化がその最大の要因だ。強いて言うなら日銀のデフレ政策が悪い、ということになる。でも何が要因であるにしても、かつての勢いはない。大森なんかどうでもいいやと思えるような、新しいブレイクスルーは見あたらない。むしろあらゆる面で縮小退却の色が強いように思う。これはぼくがこうした分野にあまり関心がないための誤解かもしれないけれど。ただ、パイ縮小期に態度を変えるのが難しいのは、ここ20年の日本の不況で多くの人が示した動きでもわかる。

10.2 SF ファンダムと大森望の地道な活動成果

これに対して、大森望の側はどうだったろうか。

かれは相変わらず、普通にリア充しつつ、それまで通りのSFファンダム活動を続けていた。そしてSF

の分野でもそれなりに企画をたて、小粒ながら継続的にイベントを催し、翻訳を行い、あちこちで SF を紹介して旗を振り……かれは日本 SF の将来について、すごいマスタープランを持っていたわけではない（と思う）。でも伊藤計画を盛り立てたりして、うまいこと流れを作ってきたのは否定できない。過去 10 年くらい撒いてきたタネが、最近ではそれなりに芽を出して収穫期に入っているようだ。大したものだと思う。何度も述べたけれど、かれはアカデミズム的な SF 評論を否定しているわけではない。おもしろければ、そうしたのも採りあげてほめる。そうした融通無碍な方針は、長期的には大森望にも、そして SF 全体にとっても有利に働いてきた。それは古くさい内輪っぽい、洗練されない幼稚な SF ファンダムを継承した方法論だったけれど、結局はそれが地道に効いたということだ。

たぶんそれを踏まえると、もはや SF ゲッターや旧態依然としたファンダムが、SF の発達を阻害し足をひっぱるもので、その将来にとって有害だという見方は、だれもとれないだろう。もちろん、そういうのが嫌いだ、というのは各人の勝手だ。でもここまで述べたようないきさつがなければ、それをことさら敵視すべき理由もないはずだ。

そしてぼくは最近の動向は知らないので断言はできないけれど、伊藤計画の遺産のまわりに、小粒な評論家たちが群れているように見える。細かくは知らないけれど、その評論家たちも派閥を作って内紛ごっこを繰り返しているらしい。その評価について、ここでは触れるまい。ただ SF 評論や批評が自ら運動を作り、作品を生み出し、それをさらに批評するというサイクルをつくり、ミーハーな内輪感覚の SF ファンダムなんか排除できるという目論見は完全に消えている。作品があり、評論や批評はあくまでそれにたかる存在、という昔ながらの構図が復活している。ファンダムも、相変わらず軽薄ながら、市場を下支えする存在として—そして人材プールとして—機能しているようだ。そしてその作品側の流れを多少なりとも作り、盛り立てている一人が大森望だということも否定しがたいことだ。でも自分たちがそのおこぼれに預かっているという構図が我慢ならない人もいるのかもしれない。

11 まとめ

まとめておこう。

2014 年初頭（そしてそれに先立つ 1992 年）、大森望が SF 協会への入会を否決されたことの根底には、かつて巽孝之が大森望の文章にプライドを傷つけられたと感じた、のが原因だとされる。その直接の原因は、山形が知る限りたった一言ではあった。でもその背後には、1980 年代に巽孝之が脱構築的な方法論をとりいれて SF 評論を学問的にも立派なものにしようとした動きと、それが必ずしもスムーズにいかなかったことにも関連した苛立ちがあったんじゃないか。そして、当時のバブル経済とニューアカデミズムとサイバーパンク隆盛が、アカデミズム的な方法論の支持者たちにかかなり強気な態度を可能にしつつも、その後のバブル経済崩壊と並行してそのすべてが低迷し、強気を継続できなくなって引込みがつかなくなったことが、その後の火種をさらに拡大したんじゃないか。

以上はぼくの見方だ。最初のほうでも述べた通り、ぼくは SF ファンダムのゴシップにそんなに詳しいわけではない。それに、こうした状況証拠以外にはもちろん確認しようもないことばかりだ。ほかの解釈もあるだろうし、ぼくの知らない事実もあるだろう。その意味では、あくまで憶測の域を出ないものではある。でも、細部はどうあれ、こういう力学は確実にあった。

一方の巽孝之の著作をその後たまに見る限りでは、もはやかつてのファンダムでの活動など、なかったことにしたいようにも見える。かれの著書『思い出のブックカフェ』（2009）のプロローグは、いきなり留学時代の話から始まっていて、ファンダム時代の話はほぼない*8。ぼくから見れば、ファンダム時代の活動こそがかれの原点に思えるし、またかつて『科学魔界』に載った「わたしの履歴書」的なエッセイ（確か、何かの賞を受賞したときのエッセイだかスピーチだか）では、もともと SF の創作から入りつつ新たな分野として SF 評論を志した経緯が生き活きと述べられていた。むろん、そうした過去を切り捨てるのは本人の勝手なのだけれど、それなら……ファンダム時代の遺恨を数十年たった今までひきずるようなことはしなくてもいいんじゃないかな、とは思うのだ。

*8 「学生時代には友人たちと読書会を定期的に行い」（p.4）、という一節がかりうじてそれに触れた、ほぼ唯一の下りにも読めるが、それすら明確ではない。

かつてはSFの看板を背負い、もっと広い領域に撃って出る野心すら抱けた人々が、かつては否定……はしなくても論難していたはずのSFゲッターや不合理性の中での、小さな利権や派閥政治でしか話題にあがらないというのも、何とも悲しい話だ。そして、そんなつまらない意地張りの結果として、瀬名秀明のような有能かつ誠実な人物さえ疲弊させ、遠ざけてしまったことがいかに大きな損失かを認識できなくなっているのは、残念なことだ。それだから衰退するんだ、とってしまう一方で、本稿でも触れたとおり、まさに衰退しているからこそこうした力学が増幅されるというのも事実。

むろん本稿で述べたことはどれも、別にアカデミズム的なアプローチ（またはそれ以外の手法）がまちがっているとかよろしくないとかいうことでは一切ない。ぼくはむしろ、こうした動きがもっと盛んになって、もっと豊かな成果を生み出してくれればと思っている。特に、永瀬唯がもっともっと（きちんとした技術史やSF史の分野で）活躍してくればよかったのに、と心底残念に思っている。そうならなかった理由の多くは、本稿で述べた通り外的な要因が大きかったのかもかもしれない。国内に関する限り、ある種の党派的なふるまいが評論の各種活動の内容にも負の影響を与える面はあるとは思う。そしてそれがまた、分野としての低迷に拍車をかけた面はあるだろう。

そして本稿で触れた『一九八四年』をめぐる論争を見ても、サイバーパンクを巡る論争を見ても、その内容についての評価はどうあれ、どちらの側もSFを愛し、SFファンとして、それをもっとよくしたいという熱意は疑いようがない。あの当事者たちが、いまの状況を見たら確実に軽蔑したことだろう。そしてそれこそがSF業界の最悪の部分だと即座に断じたはずなのに。かつてSFは、四畳半的なウェットな日本の私小説的文学世界を嫌い、多少は科学と合理性を備えた世界へのあこがれを持つ人々を引きつけていた。全員とは言わないが、そういう部分は確実にある。それがこんなていたらくに墮してしまうとは。これを書きながら古いファンジンを引っ張り出して、ぼくはつい遠い目をしてしまったことであるよ。そして多くの人には、遠慮して言わないけれど、まさにそういう気持ちで今回の一件を眺めているはず。いつか、このよじれた状況が多少は改善するといいのだけれど……としおらしく書いてはみたが、もはや本気で期待などしていない自分がいるのは、ちょっと寂しい気もする。

Version History

- V1.0 2014.05.18—書いてはみたが、この話についてこれる人もあまりおるまいと思ってお蔵入り。
- V1.1 2014.10.13—いくつか引用を改善。
- V1.2 2015.09.24—`pLATEX` から `LuaLATEX` に移行。細かい修正。
- V1.3 2015.12.20—細かい記述の修正と拡充。